九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

この「翁」は「嫗」である：『竹取物語』の本文批判

後藤，康文
北海道大学大学院教授

https://doi.org/10.15017/19768

出版情報：語文研究. 107, pp.1-8, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

この「翁」は「嫗」である

――『竹取物語』の本文批判――

後藤康文

何も、竹取の翁が実は女性であった、爺さんは男装の婆さんだったのだ、などという奇想天外な話を始めるわけではない。本稿で指摘したいのは、現存の『竹取物語』本文中において、本来「嫗」とあるべき所が、伝写の過程でいつしか「翁」にすり替わってしまった箇所があるのではないか、というほんの小さな問題なのである。

一

それは、火鼠の皮衣を携えた右大臣阿部御主人を翁が屋内に招き入れた、その直後の文章中に現れる。

かく呼び据ゑて、「このたびは、かならずあはむ」と、嫗の心にも思ひをり。この翁は、かぐや姫のやもめなるをなげかしければ、「よき人にあはせむ」と思ひはかれど、せちに「いな」といふことなれば、えしひねば、ことわりなり。（武藤本・二一オ～ウ）[注1]

何せ、この世にはありえないほど美しい皮衣を目の前に突きつけられたのである。御主人はかぐや姫の難題をみごとに達成したと確信されたのだから、翁はもちろん、妻である「嫗」も「今度こそは、きっと結婚することになるだろう」と期待を高めるのももっともであり、そこまではまったく問題ない。強い違和感を覚えるのは、その後の記述なのだ。なぜここで、今さらながら「翁」の心境や対応について語らなければならないのか。その必要性はいったいどこにあるというのか。諸注[注2]積極的な発言がない中で、『評解』（底本武藤本）は次のように述べる。

さて最後に嫗の気持を述べたので翁の気持も叙述しようと、むしろ蛇足とも思われる文を直ぐ次に加えている。

（中略）これは明かに文の構成として、前後の描写に対してもだしぬけであり、読者にも既にわかりきっている不要の文字であるが、作者の描こうとしている中心人物「翁」の説明として、思わず繰返した作者の気持であったのであろう。それだけに如何に作者が翁を重要視していたかが窺える。

（批評・考説）

現存の本文を絶対の前提とするかぎり、「この翁」以下の文章はたしかに「蛇足」であり「不要の文字」というほかないのであるが、ことさらな「繰返し」の理由を「作者が翁を重要視し」た点に帰してしまうのはどうかと思われる。

そこで、当該本文を細心に読み返してみると、この記述が「翁」のためにわざわざ添えられたと考えるには、かなり無理があることに気づかされるのである。すなわち、かぐや姫が独身でいることを憂慮して、身分ある男性に縁づけたいと「思ひはか」っていたというのも、かぐや姫が結婚を峻拒するので「えしひ」なかったというのも、ともにこれまでの「翁」の描かれ方にはそぐわないのだ。彼が良縁を切望する姿勢は、心中で「思ひはか」るという控えめな次元にとどまるものではなく、また、彼はこれまで、かぐや姫に対して十分に結婚を「しひ」て来たのではなかったか。先に表明した「強い違和感」は、つまるところ、こうした点に由来していたわけである。

ところが、どうであろう。「この翁」の「翁」を、かりに「嫗」に置き換えてみると、上述の不審が一挙に解消するのだからおもしろい。考えてみれば、気を揉むだけで強い態度に出られないというむしろ消極的な姿勢の描写は、主導的役割を演じる「翁」ではなく、従属的立場に甘んじる「嫗」にこそふさわしいものであった。後に、かぐや姫に興味を示した帝が、その美しさを確かめるべく内侍中臣房子を派遣した時、応対に出たのはほかならぬ「嫗」であったが、中でも、

かぐや姫の答ふるやう、「帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず」といひて、さらに見ゆべくもあらず。産める子のやうにあれど、いと心恥づかしげに、おろそかなるやうにいひければ、心のままにもえ責めず。

（武藤本・三六ウ～三七オ）

というくだりが、自然と思いあわせられることになるのではなかろうか。

『竹取物語』の現存諸本において、傍線部分の本文はすべて、「翁」（武藤本・紹巴本・古活字十行本等）または「おきな」（高松宮本・久曽神本等）であるようだけれども、(注3) こう

なるともはや、元来は「おうな」「おむな」などと記されていたとしか思えなくなるのである。

二

前節で提起した仮説は、叙述の内容面のみならず、文章構造の論理自体がおのずからその妥当性を裏づけてくれる。

その第一は、「翁」に冠せられた「この」という指示語の問題であり、これについてはふたつのポイントがある。ひとつめは、作中で竹取の翁が「翁」と呼ばれる場合、

・かくて、翁、やうやうゆたかになりゆく。

（武藤本・一ウ）

・翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。翁、竹を取ることひさしくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。

（武藤本・二オ）

・翁、今年は五十ばかりなりけれども、もの思ふには、片時になむ老いになりにけると見ゆ。（武藤本・四五ウ）

等々のごとく、単に「翁」とのみ記されるのがどうやら鉄則であるようで、疑惑の箇所一例だけが、なぜか例外的に「この翁」と表記されているという点である。少なくとも主要な伝本を見るかぎり、「翁」に「この」が上接するケースは他にない。とするならば、ここで「この翁」としなければならない特段の事情が見つからないかぎり、この「翁」なる本文は十分に疑わしいということになるのではあるまいか。

ふたつめは、しごく単純素朴な疑問だが、「この」は通常、直前ないしそれほど離れていない既述箇所に登場した人物や物をあらためて指し示すことばではないのかという点。つまり、「嫗の心にも思ひをり」につづけて「この」誰それと書かれているのであってみれば、「この」は「嫗」のことを指していると受け止めるのが自然だということなのだ。試みに、このような問を設けてみてもよいかもしれない。左の文章の空欄に、あなたなら「翁」・「嫗」いずれの語を選択して入れるであろうか、と。

かく呼び据ゑて、「このたびは、かならずあはむ」と、嫗の心にも思ひをり。この〔　　〕は、かぐや姫のやもめなるをなげかしければ、「よき人にあはせむ」と思ひはかれど、せちに「いな」といふことなれば、えしひねば、ことわりなり。

先入観を捨て去って向き合ったならば、圧倒的多数が、「嫗」と解答するに相違あるまい。この文章の構造はたとえば、庫持皇子が蓬莱の山で仙女に出会ったと騙る場面、

天人の装ひしたる女、山の中より出で来て、銀の金椀を持ちて、水を汲みありく。これを見て、船より下りて、「山の名を何とか申す」と問ふ。女、答へていはく、「これは蓬莱の山なり」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。この女、「かくのたまふは誰ぞ」と問ふ。

（武藤本・一三ウ～一四オ）

などに、よく似ているといえるのである。

以上、本節では、指示語「この」が「翁」に接続するのは作中きわめて異例であり、かつ、この語は直前の「嫗」を指すと考えるのが妥当であるため、「翁」は「嫗」の誤りではないかということを述べた。

三

さて、第二は、「えしひねば、ことわりなり」である。語り手はいったい何を「ことわり」だと評しているのだろうか。まずは、諸注の見解をいくつか紹介しよう（傍線筆者）。

・強いることも出来ないので（心配するのも）尤もである。

（『評解』・口訳）

・無理強いすることもできず、それで（また思い謀るのも）当然である。

（『全訳注』・現代語訳）

・強いることもできないので、今度の期待は当然である。

（『全対訳』・口語訳）

・強いることができずにいるので、この期待も当然である。

（『新編全集』・口語訳）

・今までも強制することができずにいたので。／この機会をつかんで結婚させようと一生懸命になるのももっともだ。

（『新大系』・脚注）

大まかに分けるならば、初めの二書は「この翁」が「思ひはか」ることを、後の三書は「この翁」が「このたびは、かならずあはむ」と「思ひを」ることを受けての評言と解釈しているようだが、前者はもちろん、後者も不正解。当該文脈を正確にたどってみると、「ことわりなり」と評されているのは、翁は無論、「嫗」も「このたびは、かならずあはむ」と「心」の中で「思ひを」ること、それ以外にはありえないと判断されるからだ。気づいた範囲で挙げておくと、

姫が結婚をしきりに断るので、翁たちが無理に結婚させることもできないから、いろいろ心配するのももっともである。「え強ひねば」の下に、翁たちが「心配する・嘆かわしく思う」などの意を補う。

（脚注）

とする『旺文社文庫』（底本武藤本）の解は、「心配」説に立つのが不可とはいえ、評言の対象を「翁たち」と捉えている

点は多少評価してよく、さらに、「ことわりなり」の横に「〔嫗の期待も〕」と傍注を付した『集成』（底本高松宮本）、ならびに、

嫗としても無理に強いることが出来なかったので、こう思うのも当然である。嫗の消極的態度を説明しているのである。（頭注）

と説く『異本対照』（底本古活字十行本）は、この問題に関するかぎり正解を提示している。『集成』や『異本対照』の解は、「この翁」で始まる一文の途中でその主体が転換した、あるいは、転換させなければ辻褄が合わないと考えた結果だと推察されるが、現存の本文をこのように解釈するにはやはり無理があり、ならばいっそのこと、「この翁」を「この嫗」へと外科的かつ劇的に「転換」すべきではなかったのかと、もどかしく思われてならないのである。

なお、「えしひねば」（武藤本の原表記は「えしいねは」）には、「えしひぬは」（島原本・山岸本・正保三年刊本等）、「えしゐぬは」（武田本・群書類従本等）の対立異文があり、[注4] 田中大秀の『竹取翁物語解』の影響もあってか、比較的年代の古い注釈書では「ぬは」の本文を採るものが多い。のみならず、「ねば」の本文に拠った諸注の中にも、

底本「えしひねば」であるが、誤写であろう。島原本・武田氏本などに「えしひぬは」とあるのに従う。（語釈・文法）

として本文を改訂する『全釈』（底本古活字十行本）や、

武田本などに「え強いぬは」とあるが、「無理にすすめることが出来ないのは」の意で後への続きがよい。このままでは、（中略）と補訳が必要となる。（釈）

と述べ、本文はそのままで、

姫が頻りに嫌だというので、無理強いできないのも当然である。（訳）

と訳す『全評釈』（底本武藤本）など、むしろ「ぬは」の方を是とする立場もある。

なるほど、「えしひぬは、ことわりなり」の部分だけに限定すれば、一見このかたちの方が解しやすいかのように錯覚されるが、「この翁」以下全体の流れにこれを置いてみると、「無理強いできないのは道理だ」などというコメントが、どれほどちぐはぐなものであるかはただちに知られるところであって、問題にならない。『全釈』の判断とは逆に、原形「ね（禰）は」が、字体相似に原因する書写者の読みなしによって「ぬ（奴）は」に写し誤られてしまったというのが、この異文発生のしかるべき過程ではないかと思われる。

以上、本節では、「ことわりなり」と評されているのは、

さすがのかぐや姫も今回はきっと結婚することになるだろうと期待する「嫗」の心中としか解釈できないことを述べた。前節で明らかにした「この」の問題とあわせて、第二文は第一文の補足説明にあたるという一連の文章の構造からみても、この「翁」がもともと「嫗」であったことは疑う余地がないのである。

四

『竹取物語』の嫗は、当然のこととはいえ、翁に比べるとはるかに存在感の希薄な人物である。そこで、「嫗」が登場する箇所を作中から順次漏れなく拾い出して、その様相を確認しておくことにしよう。

① 手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。（武藤本・一オ～ウ）

② かく呼び据ゑて、「このたびは、かならずあはむ」と、嫗の心にも思ひをり。（武藤本・二一オ）

③ 房子、承りてまかれり。竹取の家に、かしこまりて請じ入れてあへり。嫗に、内侍のたまふ、「仰せごとに、かぐや姫のかたち優におはするなり。よく見て参るべきよしのたまはせつるになむ、参りつる」といへば、「さらば、かく申し侍らむ」といひて入りぬ。かぐや姫に、「はや、かの御使に対面し給へ」といへば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」といへば、「うたてものたまふかな。帝の御使をば、いかでかおろかにせむ」といへば、かぐや姫の答ふるやう、「帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず」といひて、さらに見ゆべくもあらず。産める子のやうにあれど、いと心恥づかしげに、おろそかなるやうにいひければ、心のままにもえ責めず。嫗、内侍のもとに帰り出でて、「口惜しく、この幼き者は、こはく侍る者にて、対面すまじき」と申す。（武藤本・三六オ～三七オ）

④ これを見て、親どもも、「何ごとぞ」と問ひさわぐ。（武藤本・四三ウ）

⑤ 嫗、塗籠の内に、かぐや姫を抱かへてをり。翁も、塗籠の戸をさして、戸口にをり。（武藤本・四六ウ～四七オ）

⑥ 嫗抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。（武藤本・五一オ）

⑦ その後、翁、嫗、血の涙を流してまどへど、かひな

し。　（武藤本・五三オ）

これを見ると、嫗は、物語の発端で点出（①）されて以降、帝の求婚譚（③）およびかぐや姫の昇天（④〜⑥）とその後日譚（⑦）においては、それなりの役割を演じているが、その中間の、五人の貴公子の求婚譚部分に顔を出すのは、当該例（②）が唯一だということがわかる。しかもその一箇所が、三人目の挑戦者阿倍御主人の話の中に置かれている点については、また別の観点から考究を試みることも可能かもしれないが、それはともかく、今新たに、②の本文を補足してさらなる説明を加える一文、すなわち、「この嫗」以下の記述を②に付け足してやるならば、日頃、かぐや姫によい殿方と結婚してほしいと思案するも、姫の頑なな拒否の前には無力でいるよりほかなかった嫗の日常が窺えて、彼女の主体性なり存在感なりは、従前に比していくらか増すことになるではあるまいか。

五

この「翁」は「嫗」である、という本稿の推定が正しいとすれば、元来は「おうな」「おむな」などと仮名書きされていたものが、現存諸本よりはるか以前のある書写段階において「おきな」に誤られ、「翁」と漢字表記されるケースも生じた、ということになる。誤写のメカニズムとしては、「う（宇）」や「む（武）」の草体が「き（支）」の草体に見誤られたと想定することもできないわけではないが、この場合はどちらも「お□な」のかたちであるから、書写者の思いこみで「おうな」「おむな」とあるべき本文が「おきな」に誤認された、その可能性の方がむしろ高いといえようか。

最後に、再びこのような問を設けてみてもよいかもしれない。左の文章の空欄に、あなたなら「き」・「う」・「む」いずれの文字を選択して入れるであろうか、と。

かく呼び据ゑて、「このたびは、かならずあはむ」と、嫗の心にも思ひをり。このお〔　〕なは、かぐや姫のやもめなるをなげかしければ、「よき人にあはせむ」と思ひはかれど、せちに「いな」といふことなれば、えしひねば、ことわりなり。

注

注1　武藤本本文の引用は、天理図書館善本叢書和書之部第二十九巻『竹取物語・大和物語』（昭五一・八木書店）に拠ったが、掲出に際しては、該本の補入・見せ消ち等を区別なく扱ったほか、平仮名はすべて歴史的仮名遣いに改め、また、適宜漢字を仮名に、仮名を漢字に置き換え、鉤括弧を付すなど、私に整定したかたちで示した。

注2　本稿を執筆するに当たって参照した昭和期以降の『竹取物語』諸注、および論中で引用した注釈書の略称は以下のとおりである。

三谷栄一『竹取物語評解』（昭二三、改訂版・昭三一、増訂版・昭六三、有精堂）→『評解』、武田祐吉『竹取物語新解』（昭二五、明治書院）、高橋貞一『新註国文学叢書・竹取物語』（昭二六、講談社）、小島憲之『新修竹取物語』（昭二八・白楊社／平一一、クレス出版）、山田孝雄・山田忠雄・山田俊雄『昭和校註竹取物語』（昭二八・武蔵野書院）、永田義直『竹取物語新講』（昭二八、藤谷崇文館）、山岸徳平『学燈文庫・竹取物語』（昭三一、学燈社）、中川與一『角川文庫・竹取物語』（昭三一、角川書店）、岸上慎二・伊奈恒一『詳解竹取物語』（昭三二、東宝書房／昭四四、桜楓社）、阪倉篤義担当『日本古典文学大系・竹取物語』（昭三二・岩波書店）、岡一男『竹取物語評釈』（昭三三、東京堂）、南波浩『日本古典全書・竹取物語』（昭三五、朝日新聞社）、松尾聡『評註竹取物語全釈』（武蔵野書院、昭三六）→『全釈』、尾崎暢殃『竹取物語全釈』（昭四一、加藤中道館）、片桐洋一担当『日本古典文学全集・竹取物語』（昭四七・小学館）、上坂信男『講談社学術文庫・竹取物語全訳注』（昭五三・講談社）→『全訳注』、野口元大『新潮日本古典集成・竹取物語』（昭五四、新潮社）→『集成』、室伏信助『全対訳日本古典新書・竹取物語』（昭五九・創英社）→『全対訳』、雨海博洋『旺文社文庫・対訳古典シリーズ竹取物語』（昭六三・旺文社）→『旺文社文庫』、片桐洋一『異本対照竹取物語』（昭六三・和泉書院）→『異本対照』、片桐洋一担当『新編日本古典文学全集・竹取物語』（平六、小学館）→『新編全集』、堀内秀晃担当『新日本古典文学大系・竹取物語』（平九・岩波書店）→『新大系』、上坂信男『竹取物語全評釈（本文評釈篇）』（平一一、右文書院）→『全評釈』、室伏信助『角川ソフィア文庫・新版竹取物語』（平一三・角川書店）。なお、小山儀の『竹取物語抄』（天明四）にはじまり明治期に至る主要注釈書については、上坂信男『竹取物語全評釈（古注釈篇）』（平二、右文書院）を参照した。

注3　中田剛直『竹取物語の研究（校異篇・解説篇）』（昭四〇、塙書房／平一一、クレス出版）五七～五八頁、王朝物語史研究会『竹取物語本文集成』（平二〇、勉誠出版）二一三頁等。

注4　中田剛直『竹取物語の研究（校異篇・解説篇）』五八頁、王朝物語史研究会『竹取物語本文集成』二一四頁等。

（ごとう　やすふみ・北海道大学大学院文学研究科教授）